

新型コロナ 面会制限続く高齢者施設 「早く手を握りたい」「いつ自由に会える」 ガラス1枚が大きな壁に 鹿児島県内

9/4(日)南日本新聞社



ガラス越しに手を合わせる親子＝鹿児島市の特別養護老人ホーム「ラ・コリーヌ伊敷台」（南日本新聞社）

新型コロナウイルスの爆発的な感染が収まらない中、鹿児島県内の高齢者施設で入所者と家族の面会制限が続いている。「自由に会える日はいつになるのか」「早く手を握りたい」。オンラインや窓越しでの対面を余儀なくされ2年半。入所者の家族は、交流再開の先行きが見えない状況にもどかしさを募らせる。触れ合いの制限は、入所者の心身に影響を及ぼしかねず、施設側の悩みも深い。

「流行の波が来るたび、感染者は増える一方。一緒に食事をしたり、部屋に泊まったりできる日はどんどん遠のいていくよう」。鹿児島市の加納砂代里さん（61）は嘆く。

93歳と85歳の両親は、霧島市の有料老人ホームに入所している。最後に直接会ったのは、国内初の感染者が確認された翌月の2020年2月。この2年半の間、両親とも入退院を繰り返し、母親は脳梗塞で車いす生活になった。

今年6月、ガラス越しに会えるようになり2年4カ月ぶりに2人と対面した。「脳梗塞による失語症でうまく言葉が出ない母が、必死に歌を口ずさんだ。せめて手を握りたかった」

その後も面会を続ける。「生身で向き合えるのはありがたい。でも間にあるガラス1枚が大きな壁のように感じる」と加納さん。「会える日が必ずくる。それまで元気で頑張っている」。毎月欠かさず送る手紙は、いつもそう締めくくる。

鹿児島市の男性（70）は、職場に近い南さつま市の特別養護老人ホームに毎日朝夕出向き、父親（98）と窓越しに会う。

入所したのは今年6月。それまでは弟と交代で実家に泊まり込み、一人暮らしの父親を世話した。だが意思疎通や歩くのが難しくなり、在宅介護に限界を感じた。「コロナ下で一

度施設に入れば自由に会えなくなるし、父も家に帰れない」。苦渋の決断だった。

毎日顔を見ているとはいえ、反応が鈍い時もある。「私が誰なのか分からなくなるのではと怖くなる。早く散歩に連れ出して耳元で声をかけたい」と願う。

国は昨年11月、利用者や家族の生活の質を考慮し、直接対面を含め制限緩和の対応を検討するよう自治体に通知した。県はこれを受け、ワクチン接種状況などを踏まえ、対面での面会実施の検討を高齢者施設に要請。だが年明けからの感染爆発を受け、緊急時を除き再びオンラインなどによる面会制限を求めている。

判断は各施設に委ねられる。県老人福祉施設協議会によると、今夏は重症化リスクの高い高齢者の集団感染にこれまで以上の強い危機感を抱き、窓越し面会を休止する施設も増えた。

「家族と自由に会えなくなり認知症が進んだり、不安感が続いたりする利用者もいる」。60人が入所する特養かもいけ（鹿児島市）の寺脇勇一郎施設長（44）は明かす。今春、「窓を隔てるより話もしやすい」と時間や人数を制限し、アクリル板越しの面会再開に踏み切った。「アクリル板も外し手を触れ合えるようにしたいが、今の感染状況ではこれが限界」と語る。

ガラス越し面会を続ける特養ラ・コリーヌ伊敷台（鹿児島市）を運営する銚之原律子理事長（64）は、「オミクロン株はほとんど軽症で大したことがないという社会の風潮と、医療・介護現場との間には、コロナに対する危機感にかなり温度差がある」と漏らす。